

中国におけるオウム分布の変遷

何業恒¹・文煥然²・譚耀匡³

¹湖南師院 ²中科院地理所 ³中科院動物所

訳 福井和二

摘要 中国における鸚鵡について記載された文献は、非常に早くから見られ、歴史的に彼らの分布は大きな変化を遂げてきた。清朝の道光以前、黄土高原西部の蘭州、六盤山、隴山一帯の鸚鵡はすでに絶滅して久しい。長江流域から雲南省東北、貴州省西北、成都附近、さらに安徽省南部、浙江省東部の鸚鵡は清朝中葉以後、迹を断ってしまった。これは華南、雲南省の鸚鵡の分布域と個体数にとって非常に大きな変化であった。中国の鸚鵡分布の変遷は、我が国の森林の変遷をそのまま反映しているものである。

1. 鸚鵡の特点およびその研究の意義

鸚鵡は現在の分類学上鳥綱(Aves)、オウム目(Psittaciformes)、オウム科(Psitacidae)に属する。彼らの個体の大きさは一様ではなく、体長89mmから991mmまで大きな差がある。世界全体では320種¹⁾を有し、アジア南部、大洋州、アフリカ、中南米に分布し、主要な分布域は大洋洋州である。アジア大陸南部ではPsittaculaとLoiculus属のうち12種が分布し、我が国には両属の6~7種が分布している。

鸚鵡は全種典型的な樹上棲鳥類で、一般的に光沢のある緑色をしている。彼の嘴は短く強靱で、上嘴が鉤状に曲がり蠟膜を有し、猛禽のようである。鉤状の嘴の内側はやすりのようになっており、舌は厚い肉質でよく動く。通常嘴をつかって木を攀じ登る。頭、頸は短く、翼は先が尖っており、初列風切は10枚。ふ脛は短く強健。指は前後各2本に分れ、対趾型である。

鸚鵡は我が国の古文書中に鸚鵡、または鸚姆、鸚哥、あるいは鸚鵡と書かれている。早くも春秋戦国期(紀元前481~前221年)の成書<礼記・曲礼上>の中に、“鸚鵡はよく言葉を話し、逃げない鳥”との記載がある。漢の許淑重<説文解字・第四上>に“鸚姆、よく言葉を使うなり。この鳥赤児の声で鳴く”とあり。<禽經>には“鸚鵡は背中をこすると、黙る”とある。宋の羅願<尔雅翼>巻一四<釋鳥>に“鸚鵡はよく言葉を話し、その様、梟に似て、緑の羽、赤い嘴と脚、隴右¹⁾および華南には皆これ有り”明の李時珍<本草綱目>巻四九<禽部・鸚姆>に“鸚姆、……嘴は赤く鉤型、脚雅赤く尾は長い、金色の窪んだ眼、顔や眼をよく動かし、よく目ばたきをする。赤児のような舌をしている。趾は前後二本に分れ、よく群れをなしている”とある。オウムは我が国の庶民生活に深く関わっていたと見ることができ、また、文献の記載もきわめて豊富であり、これらは基本的に現在の観察と一致している。長い歴史の間にオウムに関する詩文は数多いが、これらを一々述べているわけにはいかない。

多くの鸚鵡の種類は山林で群れをなして行動しており、漿果、堅果、その他各種の果実や幼芽、若葉等を食し、脚を上手にを使って採食する。鳴き声は大きく鋭く、遠くまでよく聞こえる。ほとんど、樹洞、岩の割れ目、シロアリの巣あるいは地面に穴を掘って営巣し、その中に産卵する。雛は晩成型で、孵化後の雛はしばらくの間親鳥に養われ、やがて独立して生活をする。

鸚鵡の羽毛は華麗で、観賞用として飼育される。種によっては飼い馴らされた後、多くの言葉を真似るので、飼い鳥として内外に有名である。

鸚鵡と森林は不可分の関係がある。鸚鵡分布の変遷は、まさに、森林分布状況の変化を反映し

ている。我々が、我が国の鸚鵡の歴史的な分布の研究を試みたのは、我が国の環境生態の歴史的変遷が自然保護、環境保全の上で重要な参考資料として意義あるものと考えたからである。

2. 中国における鸚鵡の種類およびその分布の現状

最新の科学的研究の成果によると、現在我が国に分布している鸚鵡は2属、6~7種とされ、すべて留鳥として一定地域に生息している。

1. ホンセイインコ *Psittacula krameri* (Soopoli) 香港とマカオ、福州？
2. ダルメインコ *Psittacula alexandri* (Linnaeus) 雲南西南部から東へ広西西南部、海南島。
3. オオダルメインコ *Psittacula derbiana* (Fraser) チベット東南部の林芝、四川西部と西南部、雲南西北部、西部、および南部。
4. コセイインコ *Psittacula cyanocephala* (Linnaeus) 広東、広西、雲南？
5. スグロコSリインコ *Psittacula himalayana* (Lesson) 四川西部と西南部、雲南西北部、西部から東南部。
6. オナガダルメインコ *Psittacula longicauda* (Boddaert) 我が国の西南部と四川、籠脱け野生化の恐れ。記載によると、本種は本来野外ではマレー半島、スマトラとカリマンタン等にのみ見られるとある。
7. ミドリサトウチョウ *Loriculus vernalis* (Sparman) 雲南西南部^[1]。

《本草綱目・鸚鵡》はさらに、“鸚鵡に数種あり、緑鸚鵡は陝西、四川に産す、雲南南部と広く交わる近海諸地方に多く、数百が群飛する。南方人は塩漬けにして食す。紅鸚鵡は紫赤色でおかたは前述と同じ。白鸚鵡は西洋南蛮の産で、大きさは雄鶏ほどもある。五色鸚鵡は海外諸国産、大きさは白より緑が小さく、賢い”と記している。李時珍が材料としている緑鸚鵡はの分布範囲は比較的広く、北は甘肅、四川に至り、南は雲南南部から広西、広東、その他の近海諸地域で、紅鸚鵡の産地は明確に示さず、文意から見ると緑鸚鵡と同じ範囲ではないかと思われる。白鸚鵡と五色鸚鵡は中国産ではなく、すべて外国からの輸入品である。清の呉震方による《嶺南雜記》下巻には“白い鸚鵡は、緑の鸚鵡より大きく、頭に角毛があり、怒ると淡黄緑色の羽毛がふさふさと立ち上がり、輝くように愛らしい。大きな赤い鸚鵡は羽毛が血のように赤い。五色鸚鵡は色とりどりで美しく、皆舶来で、輸入品店で見られる。五色鸚鵡は少ない”とある。この中で述べている白鸚鵡と五色鸚鵡は李時珍が記しているものと同一物であるが、大きな赤鸚鵡は李時珍が言う所の紅鸚鵡とは異なり、別の一種である。この何種かの鸚鵡はすべて外国からの輸入で、古代の²記述に広東の羅浮山に純白のオウムを産す^[2]とあり、籠抜けしたものが野生化した可能性がある。現在中国科学院動物研究所の標本に広西省で採取された白鸚鵡があり、傍証となる。

3. 華北地域の鸚鵡の絶滅

19世紀の始まりから、特に中葉以後、我が国に現代鳥類分類学が伝来して以来、華北地域の鸚鵡について、如何なる記録も見ることができない。しかし、清朝中葉以前には、華北に鸚鵡を産したと盛んに述べられている。華北域の主な鸚鵡の分布域は黄土高原西部で、下に列記した幾つかの地域に集中している。

1. 蘭州一帯；今日の蘭州市、皋蘭県阿干鎮、甘肅省の古浪県、武威県、臨洮県、青海省の西寧一帯。蘭州一帯の鸚鵡は唐代から少しずつの記載がある。唐の詩人嶽參による《嶺南詩》巻三《題金城臨河賦樓》の詩に“庭樹巢鸚鵡、園花隱麝香”(庭の樹にオウムが巢をかけ、庭園の草花にひそかに麝香の香りが漂う)と詠んでいる。当時金城(現在の蘭州市)一帯には鸚鵡もジャコウシカも少なくなかったことを物語っている。清代の《蘭州府誌》¹⁰²と《皋蘭県誌》にはたびたび皋蘭県(現蘭州市)に鸚鵡が産出されたと語っている^[3]。道光二十三年(1843年)《皋蘭県誌

》五卷《古迹》に“石仏溝，阿干鎮南五里の大山中，……十余里谷に入り，古木が道を塞ぎ，ヒノキ，カシワが無慮数千株，鬱蒼と茂り，さまざまな薬草も多い，……林にはさまざまな鳥が多く，緑鸚鵡あり”と記されている。おおかた蘭州一帯には，当時緑色をした鸚鵡がいたのであろう。清代の地方誌狄道州(現臨洮県)の物産に“鸚鵡”とある^[4]。清の五鎮による《松崖詩録・我憶臨 好十首》に“我は臨洮を好しとぞ想う。春光充ち満ちて，大輪の牡丹が咲き，鸚鵡が群れを成して舞う”^[5]の詩句は少なからず誇大と思われるが，当時臨洮に鸚鵡が少なくなかったことを説明している！

蘭州西北の河西回廊，乾隆十四年(1749年)《五凉考治德集全誌》中の《武威県》と《古浪県》の産物中に，共に鸚鵡を産することが記されていることは，当時鸚鵡が西北域に分布していたことを示し，新疆，蒙古の境界域まで分布していたと思われる。

蘭州以西の西寧一帯に，乾隆十二年(1747年)《西寧府新誌》八卷《地理誌・物産》の“合郡所同”の“禽之類”中に“鸚鵡”とあり，これで見ると当時西寧府(現西寧市，門源回族自治州，互助土族自治州，化隆回族自治州，大通，湟源，湟中，楽都，民和，貴徳，尖扎等諸県の管轄範囲)に野生の鸚鵡が分布していたことを示している。光緒九年(1883年)《西寧府統誌》一卷《地理誌・物産》の西寧(現西寧市)，碾伯(現楽都)，大通(現大通東北の4県を含む)，貴徳(現貴徳県)等の4県の物産は乾隆府誌に詳しい。この一帯にも鸚鵡が生息した可能性がある。

とはいえ，蘭州一帯は我が国の草原地帯の辺縁にあたり，地勢は高く，東南季節風の影響を受け，比較的降水量も多く，森林の分布も少なくない。たとえば，北宋末(12世紀初頭)懐戒堡(現靖遠県)東の“屈吳山，大神山，小神山など皆森林が鬱蒼”^[6]としていた。蘭州東南の岔山は，清の雍正(1723~35年)以前はまだ“山水清秀，竹木鬱蒼，適宜耕牧”^[7]であった。乾隆八年(1743年)《清一統誌》一六四卷《涼州府・山川》武威県の東に松山があり，“上に古松多し”また，“上に松柏多し，冬夏常に青し”とあり，武威県は青山の多いところであった。乾隆期の《西寧府新誌・物産》に，当時西寧府の喬木には“柳，白楊，青楊，榆，キササゲ，樺，柏，…檉，…”ありという。同書の山川部分に西寧県(現在市)東南百七十里の順善の山林に“松，樺の材を産す”とあり，大通衛北の松樹壩に“松青く，草茂る”とある。これらの山林原野は野生の鸚鵡の生息に適した条件を提供している。しかし乾隆期以後この地域の人口が日増しに増加し，逐次森林を破壊し，野生鸚鵡も次第に減少してしまった。

蘭州一帯のホンセイインコはオオダルマインコとともに，以前はもっと北の北緯38°の武威一帯に分布していたと思われる。森林破壊と人々の狩猟により彼らの分布北限は次第に南に移り，現在では四川省の宝興一帯の北緯31°以南になってしまった。

2. 銀川以西；銀川以西の賀蘭山³等の地もオウム産出の記録がある。乾隆四十五年(1870年)《寧夏府誌》四卷《地理・物産》“禽之属”に“鸚鵡”有りと記録されている。1926年《朔方通誌・輿地誌・物産》“羽類”中にも，“鸚鵡”と記され，“俗名鸚哥と言う鳥”と説明している。この当時まで賀蘭山一帯の森林は開発されていなかったのであろう。明代嘉靖年間(1522-1566)の《寧夏新誌・山川》に賀蘭山は“城(銀川市)西六十里にあり，峰々が重なり，險阻な崖，延々五百余里，……人々が薪を集め，狩をする場”としている。乾隆四十五年(1780年)《寧夏府誌》三卷《地理・山川》に賀蘭山は“山の草木で，遠望青き悍馬の如し。北方人は逆らう馬を賀蘭と言う，故に山の名を賀蘭とす”“山は岩多く土少なし，樹木は岩を縫って生え，優に山を覆う”とあり，現在の賀蘭山にも，ある程度の森林は分布している。賀蘭山は文献による鸚鵡分布の最北端で，北緯39°附近に位置する。この一帯の鸚鵡について文献中には説明がないが，これもホンセイインコと思われる。

3. 隴州一帯；隴州は隴山から名をとり、延々と続く隴山一帯で、今日の隴県という。宝鶏市、清水県等と境を接する。《太平寰宇記》、《明一統誌》および《鳳翔府誌》(1710年)、《隴州誌》(1708年)などすべて隴州で鸚鵡を産出したと記載がある^[9]。

隴山一帯の鸚鵡については、東漢の時代にも記録が見られる。禰衡の《鸚鵡賦》に“みだりに集まって飛ばず、林で騒ぎ立てる。脚が紫紺で、嘴が赤く、美しい緑の衣裳を着る。華やかな容姿で、嘴で囁む音を立てる”^[9]。ここに記述されている隴山一帯の鸚鵡もホンセイインコと思われる。唐の皮日休による詩《哀隴民》に“隴山千万仞⁴、鸚鵡巢其峰”^[10]とある。明らかに隴山と其の附近に少なくない数の鸚鵡が生息していたようである。乾隆二十九年(1764年)《宝鶏県誌》一卷《地理・物産》に“鳥類”野禽中に“鸚鵡”あり。と書かれている。

隴州以東に、周代から明、清代に至る間の地方誌に多くの鸚鵡に関わる記載がある。たとえば、明の万暦年間(1573~1620)《鄂県誌・物産》、乾隆四十二年(1777年)《鄂県新誌》三卷《田賦・物産》および乾隆五十八年(1785年)《周至県誌》十卷《物産》などに鸚鵡の記載がある。1937年《鄂県郷土誌》下巻《物産》に鸚鵡が特産の一つとして挙げられている。

隴州以西の秦州(現天水市)では、唐代の杜甫による《山寺》(現天水市東南の麦積山)の詩中に“麝香は石竹を食べ、鸚鵡は桃の実を啄ばむ”^[11]とある。当時この一帯に麝香鹿と鸚鵡が生息したことを物語っている。《圖書集成・方輿 彙 編・職方典》五五八巻《鞏昌府山川考・秦州》に“鞏峰山、秦州南七十里にあり、その峰五つ、蒼碧削るが如し、その上に鸚鵡あり”。清の雍正(1723-1735)以前に陝西省南部の山地に鸚鵡が分布していたことを説明している。

《元和郡県図誌》三九巻《隴右道上・岷州》唐代開元(713-741)の貢ぎ物に“鸚鵡鳥”とある。康熙四十一年(1702)《岷州誌》二巻《物産》にも“鸚鵡”とある。乾隆八年(1743年)《清一統誌》一五九巻《鞏昌府・土産》に鸚鵡とあり、“府城(隴西県)および岷州より出ずる”とある。万暦十五年(1587年)《寧遠県誌》三巻《輿地・物産》、“羽類”に“鸚鵡”とある。寧遠とはすなわち現在の武山のことである。岷州、隴西、寧遠などすべて隴州以西である。

隴州以北の平涼、華定、隆徳一帯については、《太平寰宇記》一五一巻《隴右道・渭州》の“土産”に“鸚鵡”とある。これは北宋の初め渭州(現平涼県)一帯に鸚鵡が生息していたことを示している。嘉靖三十九年(1560年)の《平涼府誌》十三巻《隆徳県・物産》に“鸚鵡”という鳥がいるとあり、嘉慶元年(1796年)、《華亭県誌・田賦誌・物産》禽類は……鸚鵡……等甚だおおく、書ききれない”とある。

隴州、華亭、平涼、隆徳は隴山、六盤山附近、戸県、周至、秦周、寧遠、隴西などは秦嶺、播家、烏鼠等の山々附近にあり、宝鶏は隴山と秦嶺の間にある。これらの山地は古代には鬱蒼とした森林や竹林が分布していた。隴州で其の例を見ると清朝の初期には隴山南部の呉山には“青い峰が重なり、谷は鬱蒼と閉ざされていた”とし、樹種はキリ、エンジュ、ニレ、デロ、ヤナギ、カイドウ、クワ、ウルシ、イバラ、コウゾ、クヌギ、シナノキ、カシワ、ツゲ、コナラ、イチヨウ、キササゲ、シュロ、マツ、ヒノキ、カシ等^[13]、ならびにフジ、ハシバミなどの植物^[13]が十分に良好な成長をしていたのであろう。したがって森林も広く、鸚鵡も数多く、その他の森林棲の動物、例えば肉食獣の虎、豹のほかサル類等も生息していたであろう。

古代隴州一帯の鸚鵡は、蘭州、銀川地方と同様で、たぶんダルマインコだったのであろう。しかし、宋の建隆二年(961年)七月、隴州から宋の太祖趙匡胤に黄鸚鵡の献上があり、太祖はこれをめでたいことと認めた^[14]。金の正大六年(1229年)五月、隴州防御史で石抹冬の児に黄鸚鵡が贈られる、とあり、曰く“遠方より珍禽を贈られる、何の企みぞ、返礼の物贈るなかれと命ず”^[15]と。当時黄鸚鵡は珍禽でめでたい鳥と見られており、数も少なかったのであろう。現在は絶滅

している。

4. 長江流域における鸚鵡分布範囲の変化

長江流域の鸚鵡の主要な分布は以下の通り。

1. 成都と大小の金川一帯

清の陳克繩による《西域遺聞・物産》に“鸚鵡の巢は松や岩の間にあり、松の実を食す。群れを作って飛び、網で獲ることが出来ない。夷人は初秋の生育時の雛を獲って飼育し、成長すると其の舌先の角質を取り除き、終日人の言葉を教え、上達すれば問い掛けると即答する。嘴は生まれたときは赤く、次第に黒くなり、年を経ると赤へ戻る。羽毛は緑で他の毛を雑えない。清潔を好み、汚れるとそのつど、自ら其の毛を抜きとる。広く生息し、独り隴山のみならず”^[16]。ここに言う鸚鵡の産地は明確を欠くが、しかし、この書の奥書にある吳燕紹と執筆者陳克繩はともに18世紀の金川之役に参加し、現在の汶川、茂県、康定などの地で官職に就いていたので、大小金川地域の鸚鵡の事情に通じていても当然である。

また、清の李心衡による《金川瑣記》^[17]に“毎年ソバの成熟期に、千、百という鸚鵡が群飛し、空を覆うほどである。緑の羽は輝き、鳴き声はペチャクチャと騒がしい。農夫は竿を持ってこれを守る。賢いものはソバ畑で竿を持って、群れの集まるのを待ち、機を窺ってひっかけ^[18]、十分に生け捕りにすることができる。極めて煙を恐れ、死ぬことがあるという。嘴が赤と黒の2種がある。一説によると赤は雄、黒は雌と、また、一説によると口が黄色で^[19]、次第に黒くなり、再び赤にかえるというが、すべて、定かではない。嘴の赤いものは言葉をすぐ覚え、嘴の黒いものは、比較的言うことをきかない”とある。当時大小金川の鸚鵡はすべて留鳥ではなく、毎年ソバの成熟期になると“千百という群れが空を覆い”成熟した農産物を採食する。これらの鸚鵡は結局どこから来るのか？文献上には触れていないが、大小金川および成都一帯の山岳地帯から来るのであろう。

成都一帯はずっと鸚鵡の産出が盛んであった。《淮南子・説山訓》に“鸚鵡は言葉を喋る、しかし、長い言葉は使えない”とある。漢の高誘注は“鸚鵡、鳥の名、蜀郡(現成都市)に産し、色は帯青綠色、人の言葉をよく使う”と述べており、これらはホンセイインコであろう。明の何宇度は《益部談資》中巻で、“鸚鵡成都に甚だ多し、梁山諸県もまたこれを産す。春になると飛び交い、鳴き交わし、戦場の如し。樹下に車を止め、しばらく耳をそばだてこれを聞く”これによると成都一帯には、漢の時代からずっと鸚鵡を産出したものとみえる。これらの鸚鵡は食を求めて群れをなして飛び交い、ソバの成熟期には、大小の金川から邛崃山等を越えて来るのも可能である。

2. 雲南東北、貴州西南、西北。

普常 述《華陽国誌・南中誌》に“普寧郡は本益州⁵なり。……治滇池(現雲南省普寧、普城)、……郡土は開けた高原で、原野、田畑と沼沢が広がり、鸚鵡、孔雀が生息し、塩湖には魚が豊富である”と記されている。《後漢書》八十六卷《南蛮西南夷列伝・滇》に、益州郡⁵、“平旦で開けた土地に、鸚鵡、孔雀が生息し、塩湖には魚が豊富、金銀、畜産に富む”とあり、雲南東北地域には漢の時代より鸚鵡を産出していたことは有名であった。《太平寰宇記》八十卷《劔南道・嵩州》越嶲県に“鸚鵡山あり、山に鸚鵡多し、故にその名あり”と、唐の末、宋の初め、現四川省西南部の西昌県で、雲南東北部と遠くない地域。《圖書集成・方輿汇编・職方典》六四五卷《烏蒙軍民府物産考》の《総誌》に四川烏蒙軍民府(現雲南省昭通県)茶、竹、荔枝、生姜、鸚鵡等を産す”とし、清の陳鼎による《雲南紀游》の“平彝県(現雲南省富源県)……富源から沾益を過ぎる間、道は中原のように平旦で、両側の山は樹木が鬱蒼として、鸚鵡多し、上に下に鳴

き声耳を弄す”これによると雲南の東北地域は清代まで盛んに鸚鵡が生息していたことが見られる。

嘉靖三十四年(1555年)《貴州通誌》三卷《土産》烏撒衛(現貴州省威寧)に、“羽之属；鸚鵡”とあり、鳥類の中に鸚鵡が記述されている。《圖書集成・方輿匯編・職方典》一五四四卷《威寧府物産考》《通誌》より引用；“烏撒・河渡・黑章(現赫章県)に鸚鵡産出”とある。当時の威寧府は現在の貴州省威寧彝族回族苗族自治州である。清の黄元治による《黔中雜記》に、康熙二十二年十月から二十三年二月(1683-1684年)の間、彼が貴州平遠州(現積金県)における見聞を述べており、当時この州で“漆、……野生馬、熊胆、麝香、……鸚鵡、白鸚、鴛鴦、……”の産出が記録されている。威寧、赫章県、積金県一帯は鸚鵡が生息していたことを示している。

これまで述べてきたように、貴州省の西北部から雲南省東北部と四川省南西部は地形的に一連のもので、この一帯は漢時代以来、ずっと鸚鵡が生息していた。現在も四川省西南部の康定地域と雲南省北部にはオオダルマインコ、ズグロコセイインコが生息しているが、成都附近と大金川、小金川地域、貴州省北部一帯の鸚鵡は絶滅しており、雲南省北部では既に大きく減少している。

3. 安徽省南部と浙江省東部

光緒七年(1881年)《広徳州誌》二二卷《田賦誌・物産》に“烏之品”・“鸚鵡；山谷にこれあり、2、3月に来たり、夏に去る”とあり、季節的に渡りをしてきたようである。広徳は安徽省の南部山間位置し、浙江省に接している。当時は森林や竹林が多く、鸚鵡の生息に適していたのであろう。しかし、なぜ季節的な渡りをしてきたのか、どこから飛来し、どこへ渡っていったのか？さらに研究の必要がある。

明の万歴(1572-1620年)の頃、崇禎による《普陀山誌》二卷《物産》に烏有り、“鸚鵡；希に見る”と。普陀山は舟山群島中の一小島で、森林が多く、したがって森林性の鳥獣が多く見られるところで、そこに鸚鵡が分布することは可能であるが、“希に見る”については、二つの解釈が可能で、其の一つは、もともと数多くの鸚鵡が生息していたが、減少してしまった。他の一つは飼育された鸚鵡が放鳥された可能性、である。

5. 華南地区の鸚鵡

1. 台湾南部

乾隆29年(1764)《鳳山県誌》十一卷《雜議・物産》の“羽之属”中に“鸚鵡”ありとある。

2. 広東省中部

《寰宇記》一五九卷嶺南道循州(現龍川県西)土産の“羽”に“鸚鵡”等鳥類あり。と、また林語記によると“循州の森林は尽きるところを知らず、良材を産す”^[21]とあり、循州一帯に鸚鵡などの鳥類が生息する未開発の森林があったことを説明している。明の嘉靖三十五年(1556年)《惠州府誌》七巻の下《賦役誌・物産附》に“鸚鵡ありと《寰宇記》に記載されているが、今は無し”としている。これは惠州府(現惠州市)附近では、北宋初期以前には野生の鸚鵡が生息したが、明の嘉靖年代には既に絶滅していたのである。

3. 広東南部

主に広東南路と雲開山一帯、この大森林の中で鸚鵡を産した。唐の段公路《北戸録》一卷《鸚鵡瘴》に“広東省の南、新(現新興県)、勤(現羅定県)、春(現陽江県)州は南道と呼ばれており、鸚鵡が多い、……飛び立つ毎に千、百羽と数え、樹の葉や実を食べる。普通に飼育するが、俗に手で背中を触ることを嫌らう、触った多くの者は、病を發し、震えて倒れる。土地の人は鸚鵡病という。私はこれを経験した”。“飛び立つ毎に数千、数百羽を数え”ということはこの一帯に鸚鵡が甚だ多かったことを説明している。《南方異物誌》に“広管(現広州市)、雷(現広東省海

康県), 羅(現廉江県), 春, 勤等の州に鸚鵡多し, 人は翠の羽毛赤い嘴, 人の言葉を話す。しかし, 言葉は少なく, 隴山のものに及ばない。飛び立つ群れは数百羽。山果熟すれば, これに現れたちどころに無くなる。飼育するも手で背中をなでるのを嫌い, これを犯したものは, 病により飲み食いも出来ず卒倒する。と南方の人は言う”^[22]。北宋の初め, 楽史の《寰宇記》二六七卷《嶺南道》中に化州(現化州東北)の土産に“慶羅州に孔雀, 鸚鵡を産す”とあり, 当時の“慶羅州”はわずかに現呉川県の西南部のことであるが, やはり鸚鵡が生息していたことを説明している。《明一統誌》八一卷《広東・高州府・土産》に“鸚鵡, 呉川, 石白県に産す”とある。この中に挙げられている雷, 羅, 春, 勤等の州及び呉川, 石城等の県はすべて, 雲開大山の東南にあり, 我が国の歴史上, 象^[23], テナガザル^[24], 孔雀^[25]等の広東省における分布は, この地方一帯が中心であったことと関連している。鸚鵡もこの地域に広く分布していたとしても, 決して偶然ではない。

4. 広西中部

南宋の王象之による《輿地紀勝》一一二卷《広南西路・郁林州・景物下》に, 博白県西四十里に, 伏割山あり, 鸚鵡, 孔雀, 象多し。明末, 曹学佺の《明一統名勝誌・広西名勝誌》四卷に伏割山鸚鵡, 孔雀多し, とある。しかし, 清の嘉慶(1796-1820年)《広西通誌》一〇八卷《山川略・山・直隸郁林州・博白県》伏割山に“古く鸚鵡, 孔雀を産した”とあり, 嘉慶年間には既に, この山で鸚鵡は絶滅していたことになる。

5. 広西東南部

宋の趙汝適による《諸蕃誌》下卷《志物・鸚鵡》に“欽州に白鸚鵡, 紅鸚鵡あり”と。宋の周去非による《嶺外代答》九卷《禽獸門・鸚鵡》に“欽州で, かつて白鸚鵡, 紅鸚鵡を見ることが出来た。白鸚鵡は小さな鶯鳥ほどの大きさで, 羽毛に粉がついており, 蝶の羽のようである。紅鸚鵡は色が真紅で, 尾は鳶のようである。しかし皆, 言葉を使わず, ただただ姿のみである。欽州に多くいる鸚鵡は利口で教えやすい。土地の人はこよなく可愛がっている。ただ, 欽州にいる福建人はよく福建方言を教えている。この鳥は野鳥のように飛び回り, 群れを網で捕獲して, 小さく切り塩漬けにし……”当時欽州一帯に野生の鸚鵡が群れをなしていて, これを網で捕獲して塩漬けにしていたほど沢山の鸚鵡がいたことが想像できる。1914年《靈山県誌》四卷《生計誌・森林》にもまた“鳥類に孔雀, ……鸚鵡……”と記載されており, 我が国古代には盛んに野生鸚鵡を産した地域であると説明されている。

6. 広西西南部

元の李蘭脰等著, 趙万里校正による《元一統誌》十卷《湖広等処行中書省・邕州路》に“鸚鵡, 宣化(現南寧市), 武緣(現武鳴県)に産し, 言葉を使う”と。明の謝肇淅が広西の官職に就いたとき, その著《百粵風土記》に“鸚鵡, 孔雀は蛮洞中に甚だ多く産す”と当時の様子を示している。彼の言う範囲は, おおかた慶遠府, 郁江流域で, 少数民族が居住する地域である。元, 明以来, 郁江流域には野生の鸚鵡が生息したことを語っている。

以上述べてきた広東省南部と江西省南部は古来から盛んに鸚鵡を産した地域で, ホンセイインコ, ダルマインコ, コセイインコ, スグロコセイインコ等が生息した可能性がある。白鸚鵡は本来我が国に生息しない鸚鵡で, Cacatua属の9種の何れかが輸入されたものである。

7. 広西北部

嘉慶年代(1796-1820年)の《広西通誌》九十卷《輿地略・物産・慶元府》は《南方草木状》を引用し“石栗樹⁶(アブラギリ)は栗と同じく, 自生して3年で結実し, 外核は厚く実は少ないが, クルミに似た味がする。実が熟すると鸚鵡が好んでこれを食す”と記している。清の慶遠府(現

広西省宜山県)の管轄は現在の宜山、河地、南丹、天峨、鳳山、東蘭、環江、忻域等をいうが、雍正(1723-1735年)の《広西通誌》は《金誌》を引用し“石栗は各州、県に産す”とあり、宜山一帯は古く鸚鵡が生息していたと見られる。

8. 海南島

海南島の鸚鵡は普通に見られている。乾隆(1735-1795年)の《琼山県誌》九卷《雜誌・土産》に“鳥類にツバメ、マヒワ、カササギ、鸚鵡(注“嘴は赤く、体は緑、よく人の言葉を話す。隴山の西に産するものと異なる”)が生息する”として、自ら注釈を付している。康熙三十年(1691年)および光緒四年(1878年)《定安県誌》の土産部分に鸚鵡の他多くの鳥類について記述がある。康熙二十七年(1688年)と乾隆五十七年(1792年)《陵水県誌》の土産・鳥類のなかにキュウカンチョウと並んで鸚鵡を掲げている。海南島の東北部と南東部には鸚鵡が分布していたことがわかる。康熙四十三年(1704年)《儋州誌・星野誌・土産》に“鳥類、鸚鵡、雛は嘴が赤く、賢い。飼育してよく人の言葉を話す。嘴の黒い雛もいるが、飼う人は少なく、言葉を話さない”とあり、儋州とは現在の儋県の西北一帯である。海南島の最南部では、乾隆時代の《崖州誌・芸文誌》に、張習の《南山嶺記》を引用し、崖県一帯に緑色をした鸚鵡がいることを記している。光緒三十三年(1909年)四月、当時、広東水師提督であった李准は、崖州の榆林港に停泊中、港より二十里ほど西北の、現在塩田となっている三甲港へ行く途中“沿道の樹林に赤色、緑色をした鸚鵡が沢山いて、大きさは様々、白色の大きな鸚鵡が少し……”と《巡海記》の中に述べている^[20]。

現在海南島で見られる鸚鵡は、ダルマインコ1種で、過去にはホンセイインコ、コセイインコが分布していたと思われる。

現在、華南における鸚鵡の主な分布は海南島、広西西南部、香港、マカオなどで、清の道光年代(1812-1850年)と比較して分布範囲が縮小している。

6. 雲南省の鸚鵡

既に述べられているとおり、雲南省東北部で漢時代より鸚鵡の生息については多く述べられている。雲南省における鸚鵡の分布はごく普通のこと、数も比較的多い。唐書の斉休による《雲安行記》(すでに散逸)彼が目撃した雲南の野生鸚鵡について述べている^[27]。明の徐宏祖による《徐霞客遊記》九卷《滇游日記二》⁷に“広西府に鸚鵡最も多し、三郷県に産す。緑の羽毛、赤い嘴、五色で美しい”。雲南省東南にある瀘西県で見られる鸚鵡はホンセイインコだけで、五色の鸚鵡ではない。《明一統名勝誌・(雲南)楚雄府(志勝)・南安州》に、南安州(現楚雄州南)西北に鸚鵡山あり“平地の突き出たところに、常に多くの鸚鵡が生息している”同書の《鎮南州》に“英武関(鎮南州)の西七十里に鸚鵡関あり”とある。《圖書集成・方輿彙編・職方典》一四七九卷《楚雄府・山川考》の《通誌》を引用し鎮南州(現南華県)に“鸚鵡山は鎮南州西南一里の所にあり、樹林鬱蒼として鸚鵡の巢あり”と。上述の楚雄県と南華県は雲南省北部にあり、湖の一帯は古来鸚鵡の多いところである。清の檀萃による《滇海虞衡誌》六卷《志禽》に“鸚鵡多く金沙江あたりに産す、……”とあり、楚雄から南華、金沙江一帯に多くの鸚鵡が分布していたことが見られる。

明、清時代の雲南省における鸚鵡の産出記録は頗る多く、現在これらの府州県の状況と、対応する現在の雲南省東北部の府州県名を表に記載して理解の便に供したい。

表では明、清時代の雲南省の鸚鵡の産出が、頗る多くの府州県で記載されていることがわかる。これら主要な分布域は雲南省北部で、南部では比較的少ない。しかし、この他に文献には記載されていないが、当時雲南省全域に鸚鵡が分布していたと思われる。

我が国で記載されている7種の鸚鵡中、ホンセイインコとコセイインコを除く他は雲南省に分布している。この両種もかつては雲南省に分布していたのではないか、ただ単に文献に記載されなかったにすぎないのではないか。雲南省は我が国の鸚鵡の種類が最も多く分布している地域である。

7. 終わりに

以上述べたところを総合すると、以下の見方ができる。

1. 歴史を通して我が国の鸚鵡の分布の変遷は大きなものがある。分布の緯度からいうと、北緯39度から31度へ。分布地域からいうと、清の道光時代(1821-1850年)以前、黄土高原西部蘭州、賀蘭山、隴山一帯に鸚鵡が分布していたが、現在、絶滅して久しい。長江流域では雲南省東北部、貴州省西北、成都附近、安徽省南部、浙江省東部などに清朝初めまで鸚鵡が分布していたが、現在すべて絶滅している。華南では雲南南部に現在も残る鸚鵡の分布もその範囲は非常に大きく縮小し、数も昔に遠く及ばない。

2. 我が国での鸚鵡分布の変遷は、とりもなおさず、我が国の森林環境の変遷を反映している。鸚鵡は樹上生活者であり、森林が無くなることは、鸚鵡にとって生活の場を失うことである。古くから我が国は森林に恵まれた国であったが、清の乾隆時代(1735-1795年)以後、特にこの100年来、これらの地域の森林環境は絶え間ない破壊に曝されており、これらの地域の鸚鵡も次第に絶滅していった。

我が国における鸚鵡の分布の変遷、個体数の減少は、人間の狩猟活動とも密接な関係がある。

早くも宋代、范成大による《桂海虞衡誌・志禽・鸚鵡》中に広東・広西地区の話について“人々は鸚鵡を麴漬けにし、孔雀を塩漬けにする”と記している。これら大量の狩猟によって彼らを絶滅に追いやったのであろう。

著者注

- *01 鳥類学者の分類法によって異なる。Tynelは315種とし、Grusonは328種、ClemenとForshawは332種、Petersは334種などである。
- *02 歴代の地方誌を編纂した人々が、必ずしも野生のオウムを見たかは不明だし、地方誌の産物にオウムに関する記載があることにより、必ずしも実際と符合しているとは限らない。我々は、これら文献資料から、疑いの残る部分を篩い分けし、できるかぎり実際と符合している部分を採用した。

訳注

- *1 隴右；甘肅省隴 坻以西迪化以東の地をいう。
- *2 古代；中国では19世紀(清朝)以前をすべて古代と言うので、年代を示すものではない。
- *3 賀蘭山 3556m；寧夏回族自治区の北部、銀川市の西北、内蒙古自治区との境界にある。
- *4 仞；周代の長さの単位、1仞は0.333m
- *5 益州；現在の雲南省昆明市北西一帯の旧地名。
- *6 石栗；*Aleurites moluccana*。広東、広西、雲南から東南アジア、インドに分布し、栽培され、実から油を搾り、桐油を採取する。
- *7 滇游日記；滇とは雲南省の旧称。